

～ 防災についての意識調査 ～

**「震災時に支援した」人は住まいの災害対策も実践傾向
震災への関わりによって防災意識や対策状況に大きな差**

積水ハウス 総合住宅研究所は、9月1日の「防災の日」を前に、地震時の被害を大きく左右する防災意識や家庭での災害対策状況を明らかにするため、全国の一般の男女（20～60代）1205人を対象にインターネットで「防災についてのアンケート調査」を実施しました。日本では繰り返し震災が発生していますが備えはまだまだ十分ではありません。日々の暮らしの中でできることを一人ひとりが考え、実践するきっかけになるよう、広く調査結果を公表いたします。

- 1) 「防災の日」の「日にちも由来も知っている」人は働き盛りの40～50代でも約3割
- 2) この1年間で新たな災害対策を何も行っていない人が約9割
- 3) 特に「共助」による防災力向上が課題。日常の関係づくりや訓練実践は5%程度
- 4) 震災への関わり方によって、防災意識や家庭での対策状況に大きな差が。

「震災時に支援した」人は住まいの災害対策も実践傾向

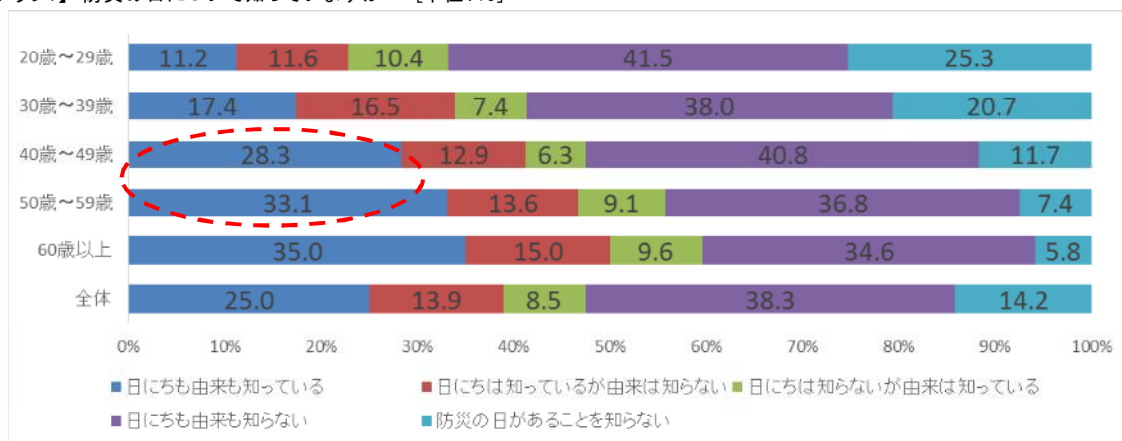
1) 「防災の日」の「日にちも由来も知っている」人は、働き盛りの40～50代でも約3割

「日にちも由来も知らない」（38.3%）「防災の日があることを知らない」（14.2%）と合わせて過半数が防災の日について知らないことがわかりました。【グラフ1】

40代、50代の働き盛りの世代でも、「日にちも由来も知っている」人は約3割に留まっています。また防災の日を知っている人は災害対策を実践している傾向があり、防災の日が災害対策に有効であることがうかがえました。【グラフ5】（3ページ目）

※「防災の日」は、台風・高潮・地震などの災害に対する認識を深め、平時の備えについて確認する日。9月1日。大正12年（1923）同日に関東大震災が起きたこと、また、暦の上で台風の多い日に当たることから、昭和35年（1960）に制定されました。

【グラフ1】 防災の日について知っていますか [単位: %]

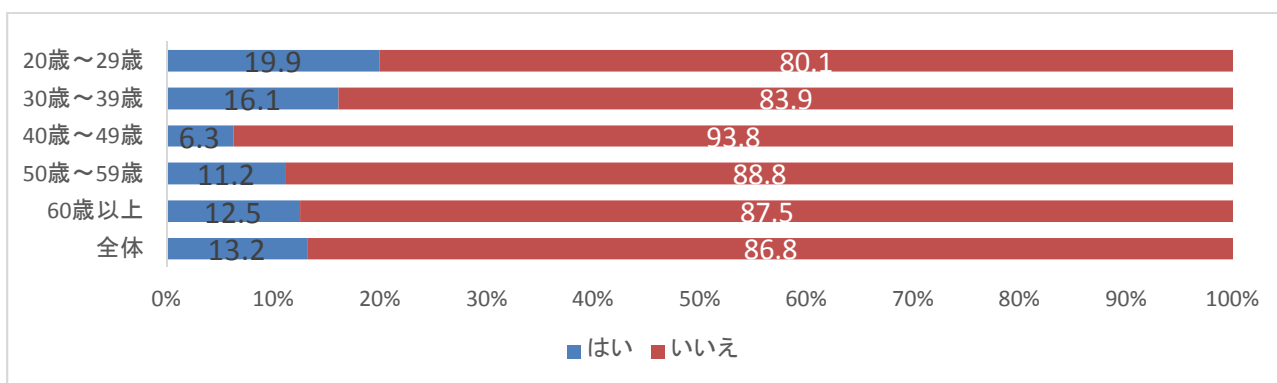


2) この1年間で新たな災害対策を何も行っていない人が約9割

この一年間で新たに災害対策を行ったかどうかの問いに、「いいえ」と答えた人が約9割（86.8%:全体）にのぼりました。20代、30代はこの1年で対策を行った人が他の年代よりも多く、対策を行った人が最も少なかったのは40代でした。【グラフ2】 この1年で新たな対策を行った人は「非常用食料、飲料水の備蓄」「災害対策グッズの整備」の実施率が高い傾向でした。

震災が繰り返し発生する中、停滞する家庭での災害対策を加速させるためには、防災意識向上の啓発活動だけでなく、日常生活の中で、缶詰など日持ちするものを少し多めに買う、家の中を整理整頓して日頃は快適に、地震時は物の散乱を防ぐなど、日常の暮らしの延長が防災になることを考え、取り入れていくことも意識向上・実践となるでしょう。

【グラフ2】 この一年間で新たに災害対策を行いましたか [単位:%]

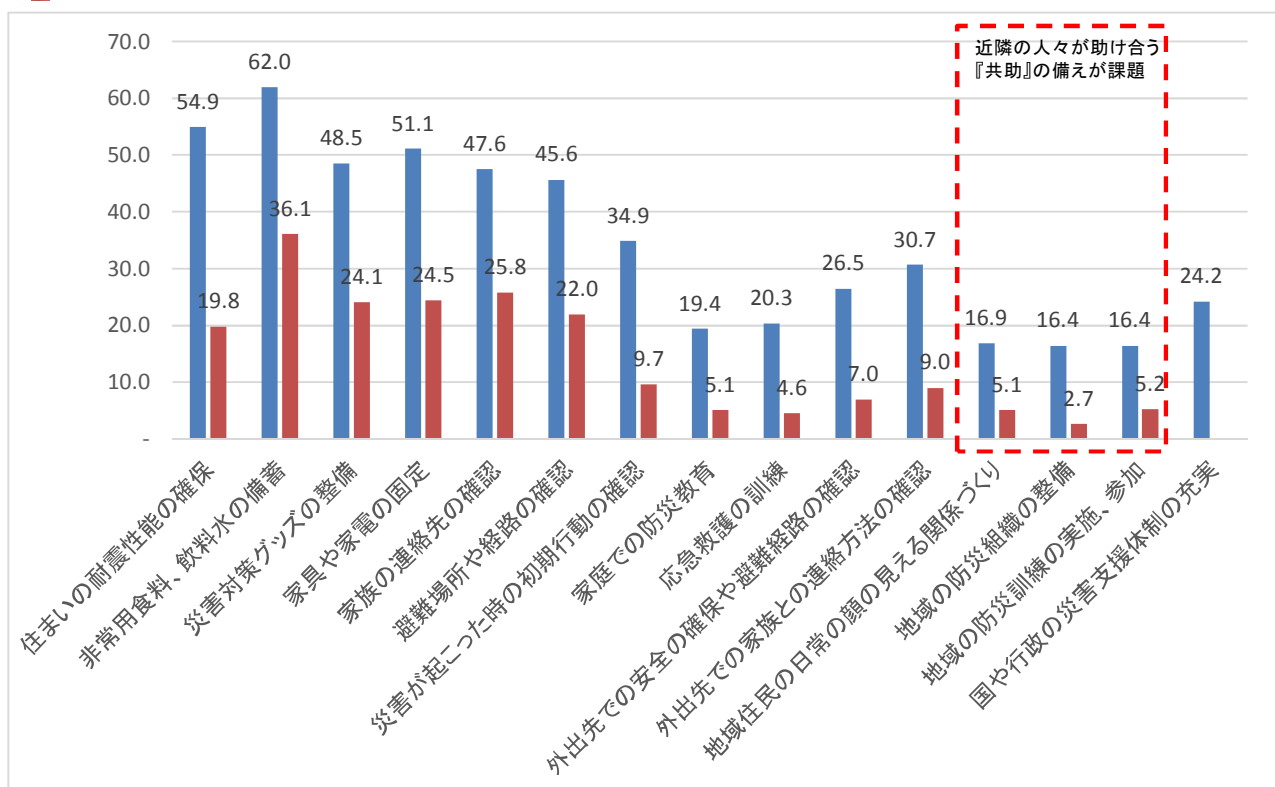


3) 特に「共助」による防災力向上が課題。日常の関係づくりや訓練実践は5%程度

地震からあなたや家族の命を守るために必要だと思うこと（青グラフ）、実際に行っていること（赤グラフ）とのギャップが全般的にあり、「非常用食料、飲料水の備蓄」や「住まいの耐震性能の確保」など自ら守る『自助』の項目が上位にきました。阪神・淡路大震災では、地震によって倒壊した建物から救出された人の約8割が、家族や近所の住民などによる『共助』でした。

「住民の日常の顔の見える関係づくり」「地域の防災組織の整備」「地域の防災訓練の実施、参加」など『共助』について必要と思っている人は16%程度と少なく、実践は3～5%程度にとどまり、近隣の人々が助け合う『共助』の備えが課題であることが浮き彫りになりました。

【グラフ3】 ■ 地震からあなたや家族の命を守るために必要だと思うことは ■ 地震からあなたや家族の命を守るために実際に行っていることは [単位:%]



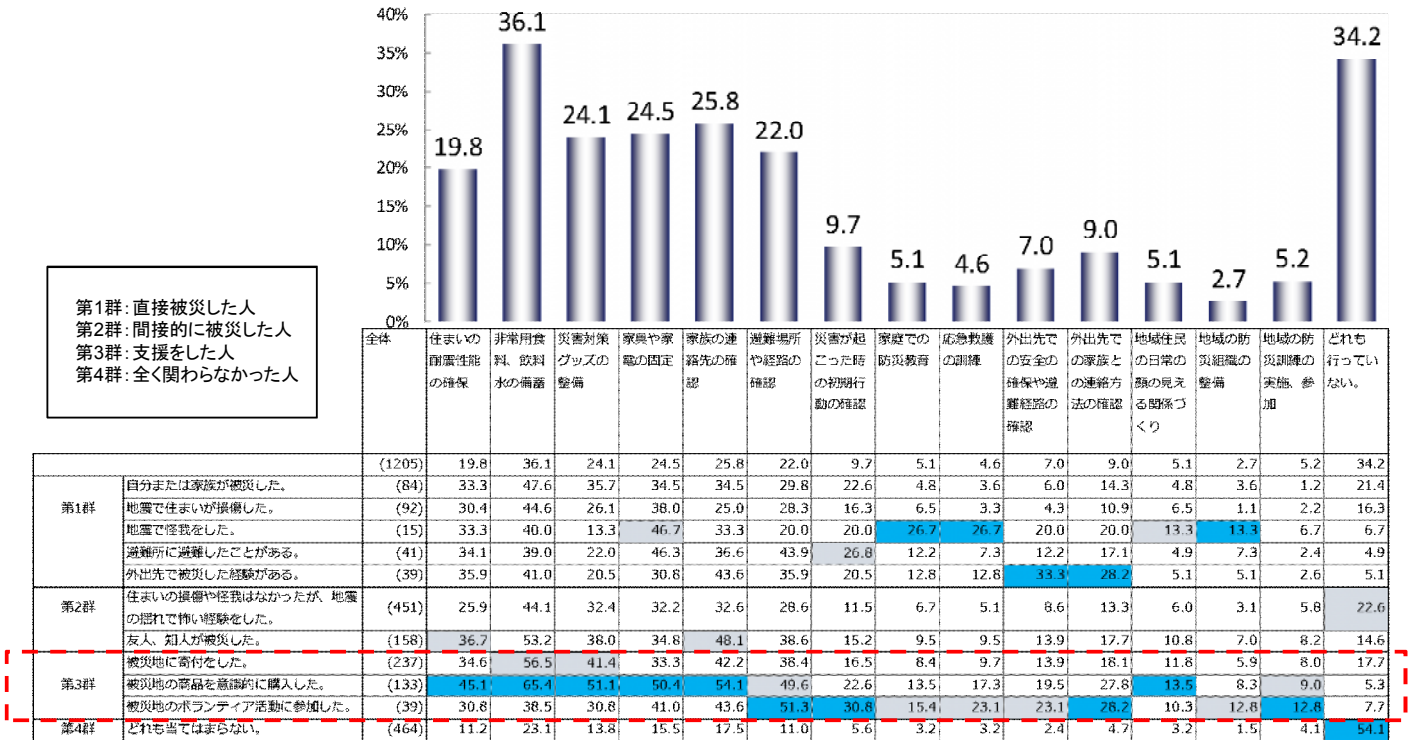
4) 震災への関わり方によって、防災意識や家庭での対策状況に大きな差が。

「被災地の商品を意識的に購入した」人は住まいの災害対策も実践傾向

『直接被災した人（第1群）』『間接的に被災した人（第2群）』『支援をした人（第3群）』『全く関わらなかった人（第4群）』という震災への関わり方による4つのグループにわけて災害対策の実践状況を見ると、「被災地の商品を意識的に購入した」など『支援をした人（第3群）』が、他のグループの人よりも、住まいの防災について具体的に行動している傾向が見受けられました。【グラフ4】

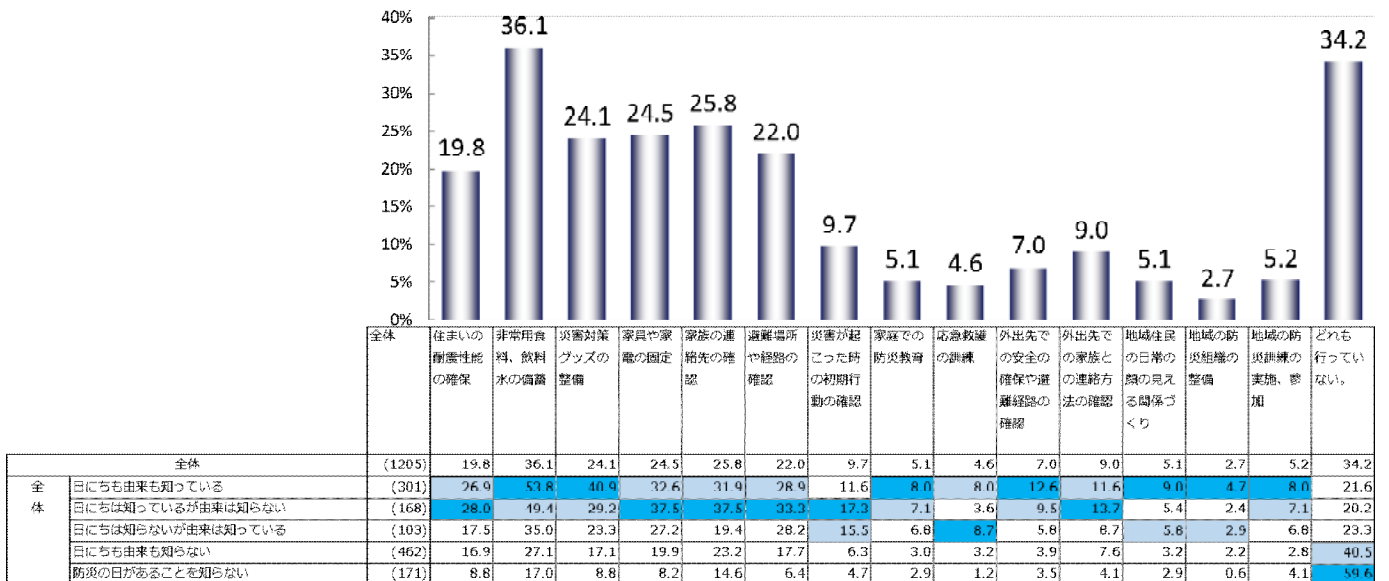
また、一般には自ら被害を受けた『直接被災した人（第1群）』の方が災害対策が進むと考えられていますが、他のグループと比べて対策は進んでおらず「喉元すぎれば熱さを忘れる」傾向が見られました。

【グラフ4】地震からあなたや家族の命を守るために あなたが実際に行っていることは（震災への関わり方別で集計） [単位:()は人、それ以外は%]



縦軸で最も多いものを青で、2番目に多いものを薄いブルーで色づけ

【グラフ5】地震からあなたや家族の命を守るために あなたが実際に行っていることは（防災の日の認知度別で集計） [単位:()は人、それ以外は%]



縦軸で最も多いものを青で、2番目に多いものを薄いブルーで色づけ

<全体考察>

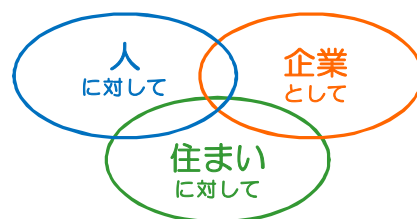
自然災害の多い日本ですが、今回の調査結果では、時間が経つと災害を忘れ、対策を怠る傾向が見られました。そのため、「防災の日に考える」「被災地の物産品を買う」など、防災を自分ごとと捉えるイベントを、防災意識や取り組みの「きっかけ」とすることが重要です。

防災意識は高くても実践に至らないことや、過去の災害において重要性が認識されている『共助』の備えが出来ていないことなど、いまだ災害対策の課題があることが分かりました。

防災力は、わざわざ災害対策を行うのではなかなか根付きません。日常の暮らしに組み込むことが大切です。日頃の暮らしの一つ一つの行動が防災力に繋がれば、わざわざではなく、いつの間にか防災力が高い暮らしとなります。例えば、日常の食料に缶詰を取り入れる、整理整頓をして片付いた空間にする、ご近所さんとの挨拶など、日頃の暮らしから取り組める防災が沢山あります。

今回の「防災についてのアンケート調査」結果の共有や、日頃からの防災力向上の提案・取り組みは、積水ハウス独自の「住宅防災」の考え方に基づいた「人に対して」「住まいに対して」「企業として」の3つの活動の一つです。この3つの活動を基本コンセプトとし、これからは住まい手や地域社会に、安全・安心・快適な暮らしを継続的に提供していきます。

総合的「住宅防災」の推進



<調査実施項目>

- ・防災の日について知っていますか。
- ・これまでに、あなたが防災の日をきっかけに行ったことをすべて教えてください。
- ・この一年間で新たに災害対策を行いましたか。
- ・あなたと過去の震災との関わりについて、当てはまるものすべて教えてください。
- ・地震からあなたや家族の命を守るために必要だと思うことをすべて教えてください。
あなたが実際に行っていないこと、関わっていないことでも構いません。
- ・地震からあなたや家族の命を守るためにあなたが実際に行っていることをすべて教えてください。
- ・ご自宅での生活のいち場面、地震から身を守る備えをしている場面をすべて選んでください。
- ・大地震に対する家についてお聞きします。「地震に強い家」とは。（複数問調査）

<調査概要>

調査概要	
調査主体	積水ハウス 総合住宅研究所
調査名	「積水ハウス 防災についてのアンケート調査」
調査対象	20代から60代の一般の男女
サンプル数	1205
調査手法	インターネット
調査エリア	全国
調査実施日	2017年7月11日～7月13日

ここから、住まいと暮らしの未来がはじまる

積水ハウス 総合住宅研究所 <http://www.sekisuihouse.com/support/sup01.html>

積水ハウスは1990年に「総合住宅研究所」（京都府木津川市）を開設。住まいづくりに関するハード・ソフト両分野の研究開発を行っています。研究所内にある「納得工房」は、住まいについて体験・学習できる施設として、大阪駅前「グランフロント大阪」内の「住ムフムラボ」は、生活者のニーズに関する情報発信拠点、生活者などとの共創研究開発拠点として、共に多数の方に来場いただいています。



総合住宅研究所（京都府木津川市）